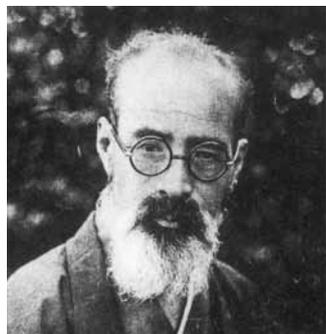


おがわ うせん 小川芋銭

えが こせい は
カッパを描いた個性派画家 牛久市



(茨城県近代美術館提供)

慶応4年(1868) - 昭和13年(1938)。明治から昭和初期に活躍した画家。本名は茂吉。江戸に生まれたが、一家が農業で生計を立てるために牛久沼のほとりに居を移す。農村風景を愛し、カッパの絵を多く描いたことから「カッパの芋銭」と親しまれ、素朴でユーモアのある作品や、幻想にあふれる多くの作品を残す。その生涯は旅を愛し、「仙境の画人」「俗中の仙人」などともいわれている。大正6年(1917)、横山大観に認められ、日本美術院の同人となる。芋銭は、日本画家と称されているが、俳人でもあり、俳画や書にも立派な作品を残し、今日も数多くの熱烈な愛好家がいる。

小川芋銭は、江戸の赤坂〔東京都港区赤坂〕で牛久藩士の子として生まれました。明治4年(1871)の廃藩置県の後、一家そろって河内郡城中村〔牛久市城中町〕に移り、農業を営みます。体の弱かった芋銭は、農作業には向いていなかったため、お婆の嫁入り先である東京の小間物屋に働きに出されましたが、これも芋銭にとっては無理な仕事でした。そこで、別の親戚に引き取られ、そこから近くの小学校に通わせてもらいました。

また、小川家の親戚に本多錦吉郎という洋画家がおり、東京で画塾を経営していたので、芋銭は3年間、その画塾で洋画を習うようになりますが、父は芋銭が絵かきになることを望んではいませんでした。

それでも、芋銭の決意は固く、ますます絵を勉強する努力を重ねました。芋銭は、南画<中国画の一つ>や日本画を描く人たちからいろいろと教えてもらっているうちに、次第に日本画に心ひかれるようになり、洋画からはなれていきました。

芋銭はその後、朝野新聞社で仕事をするようになります。帝国議会のスケッチや漫画を描きました。そして、なんとか、世に認められるようになってきましたが、父から牛久に呼び戻されてしまいます。芋銭にとってはたいへん心残りのことでした。

牛久に戻った芋銭は、農業に励みました。

しかし、農業の仕事は、朝早くから夜遅くまで働き続けなければならず、小さい時から体の弱い芋銭には、たいへん苦しい毎日でした。その芋銭の生活を助けてくれたのは、小川家に嫁いできた妻のこうでした。

こうは芋銭の分まで農業の仕事をして、芋銭が絵の仕事に集中できるように一生懸命働きました。父は、この働きぶりに感心し、そのうち芋銭のことについて、



すい み たわむる
「水魅戯」(茨城県近代美術館蔵)

一言も口にしなくなるといいます。妻のおかげで、芋銭は農業のことを考えないで、自由に絵が描けるようになったのです。

(妻のがんばりで、自分も絵が描ける。ぜったいに世に認められる絵を描いてみせるぞ。)

長い間、苦しい生活が続きましたが、それにくじけずに絵を描き続けます。

明治41年(1908)、今まで新聞や雑誌で発表していた挿絵を集めたはじめての画集『草汁漫画』を出すと、新聞社や雑誌社から仕事の依頼がたくさんくるようになり、絵も売れるようになってきました。

大正6年(1917)には、展覧会に出品した水墨画が横山大観(P.85参照)の目にとまり、「日本美術院の同人に推薦したい。」ということになり、芋銭はその申し出を受けて美術院の同人になりました。それから、いろいろな展覧会に作品をだし、注目されるようになります。

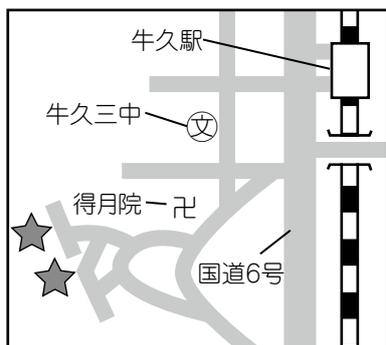
若い頃からカッパの絵を多く描いてきた芋銭は、「芋銭のカッパか、カッパの芋銭か」といわれています。農民を愛し、自然を愛し、貧しい人々に心を寄せ、時には、社会に対しきびしい批評を表した絵を描きました。心の思うままに、筆の走るままに絵を描き続けた芋銭でしたが、昭和13年(1938)12月、牛久の地で息をひきとりました。

ゆがりのスポットに行ってみよう

小川芋銭記念館(雲魚亭)・河童の碑

所在地 牛久市城中町 2690 - 3

内容 雲魚亭は芋銭のアトリ工兼居宅として建てられ、隣には、雲魚亭に移る前に創作活動をしていた草汁庵という建物があります。河童の碑は雲魚亭の敷地続きにあり、芋銭の業績を称えた文が刻まれています。



おもな 参考文献

『郷土史にかがやく人びと』(青少年育成茨城県民会議・1971)

『茨城の先人たち』(茨城県地域学習資料研究会・光文書院・1983) など